うも知 りませ 銭 形  $\bar{\lambda_{\circ}}$ れな 平 次もこ 相手は十万石の大名、 い形勢だ ん な突拍子もな ったのです。 i s 事件に つ間違うと天下の騒ぎになろ 出 つく わ たこ ع あ

来て、 次は から聞えて来ます。 り次がせて、 江 戸 回礼も一段落にな ガラ の街はまだ屠蘇機嫌で、 ッ 八 若 e st の八五郎を相手に無駄話をしていると、 男 0) 追っ立てられるような上ずった声 った安らかな心持を、 妙に ソ ワソ ワ その た 陽ひ 正 溜ま 月 りに 0 が お 四 静 表 持 日 って に 取 平

そっと廻 八、 ح って、 e s つは飛んだ御用始 あの客人に気を付けるんだ」 め になりそうだぜ、 手前れ は 裏 か ら

### 「 ヘエ |--

的なところがあります。 てますが、 八五 郎 は 腑<sup>ふ</sup> そ に落ちな のうちに be st 顔を挙げました。 何となく仕込みの良 少し造 4 猟 作さ 犬 0 0 間 ような 伸 び 好戦 は

「見なきゃ 判らな ( ) が、 多分あ 0 客人 の後を跟っ け て 11 る者 が あ

## だろう」

「ヘエーー」

える、 7 入れ違 八五郎 いる だ 不思議な若 けに、 いに案内されて来たのは、十七八の武家とも町人とも見 は呑込み兼ねた様子ながら、 間 ( ) い男。 返 しもせず、 襲われるように後ろを振り返りながら、 お勝手口 平次の の 方へ 日頃のやり口を知 姿を消 しました。

次親 分 で 御座 いますか た、 大変な事 にな りました。

ぞお助けを願います」

おろおろ た調子 ですが ` そ れ でも、 折 目 正 坐 つ てこう言

うのでした。

に 差してお 武 風 な 前 りますが 髪 立 小 言葉 倉 の め袴を着 は け て · つ か 短 ŋ か 町 11 人で 0 を す。 本 紙 め

どうなす つ た のです、 詳ゎ の調子 しく 仰 す ゃ つ て 下 さ 11 0 次第 に

つ

て

は 平次、 及ばず ながら 御 力 に な りま ょ う

平次はそう言 わなけれ ば な りません でした。 物 に 脅<sup>お</sup>び え た 美 少 年

0 柄 や様子を見ると、 そ の悩 みを 取 り去 つ て Þ ŋ た 11 心 持 で

パイになる平次だったのです。

私 は 牛込御納戸町の 一色道庵 の伜綾之助 と申します」

え ッ、 それではもしや、 父上道庵 様が?」

三人目 の行方知れずにな つ た 本 道 内 科 医 で 御 座

す

「それは大変」

こそ だ 和 漢 た 薬 あ れ れ は に です。 通じ 平 次 そ の 0 7 方が驚きました。 頃 11 日 ること 本 中 では、 に も聞えた本草家 当代並ぶ者無しと言わ 色道庵 ع **(** 今 の e s うの 博物学者) は れた 町 医 名家 |者で で、

言う 人は赤 逢 そ れ 下 つ 坂表町 は兎も角、 た ع ^ ょ でした。 死 体 う に、 0 に 流 な 平 相 昨 行 つ 次を驚 年 医者で本田蓼白先生、 つ て浮き上がりました。 11 0) 秋あた で 行方不明にな かした りから、 0) は、 江 この三人 つ て 戸 これは二十 二番目 お 0 本 ります 草学者 目 に行 0 行 日 方不 目 が 方 最 神 に 初 不 弁べん 明 隠 明 慶ぱけい に ع

本当で

ょ

う

か

を 酬<sup>む</sup>く は、 ま が 向 な 続 柳 り距り過ぎて、 原 たのは 0 け 61 疑 る ざまに の土手の上で、 の 11 の方 馬道 は ではあるま 晴 やられる で有名でしたが、 れました。 の名医、 共通 の病 袈裟掛に斬られて死んでおりました。 の 11 で、 伊藤参竜先生。これは、 か と思 人を扱った心当りもな 見立違 わ 行方不明にな れました いで死んだ病人の遺族が が、 ってか 赤 医者というより 坂と馬道 (J 0 ら で、 で 間 月目 はあ 医者 もな

きし 趣意 う 内 が 0 な b 岡 解 か つ 引 た つ り た ま が が 何 せ 血 0 0 で 眼に ん 為 した 0 に、 れ ば な 向 柳 医者 って か ŋ 原 は縄 搜 が 二 は しましたが、下手人は 雲を掴っか 張内 人 迄 続 で、 むよ け ざま 平次も暮 うで、 に 殺 全く へか さ 思る れ 手 か、 け た て の か 付 殺 ع した 御 府

ませ た自 す た 押 分の 5 詰 怠な これ 兀 つ 慢を H て そ に 0 指 は 御 0 摘され 全 噂 用 く 始  $\boldsymbol{b}$ 漸 驚きました。 めに三 たようで、 忘 人 れ 目 られ 0 犠せ 世間 • ح 性い ん 気に 古され な 並 に 掛 0 0 恥 正 伜 ŋ 月 な 入 気 飛 が つ た 分 込 ら に ま 正 な 月 れ は た を つ 迎 て え ŋ 4 で

う 御 父上 道 庵 樣 が行 方 知れ ず に な つ た 0 は、 何い時っ 0 事

「咋夜、正亥刻頃――

う。 をさ 「そ 兎に 様 5 れ は な 9 角三日 て ら大丈夫、 と月 行 や五 目で殺されま 0 に 蓼白様、 日 は 0 う 何 ちに か は した。 思 行方知 間 11 達 P 及 曲者が御府 11 れ ば が げずに あ ぬ る気 深 な 11 つ 遣 仔 内 て 細 の名 11 から二十日目、 は が 医 あ あ や本草家 ŋ ŋ ません」

綾之助は眉を顰

めました。

どう

した

のです、

親分」

曲 はさせません 者を嗅ぎ出 それはもうお請合 て、 万 ( ) に 4 た します。 つ Ŕ 父上 今度こそは 様 間 違 どん 11 0 な あ るよう をし ても

親分。 お 願 4 申 しま す

の名人と言 綾之助は 以上口 の俯向きま、 わ P 利 れた銭形平次 け な か た。 つ た のです。 にそう言 半 分 は 気 わ 休 れると、 め ع 知 つ ツイ て Ŕ 涙が先走 当 時 つ つ 引

親 分 ッ

「あ ッ 八か、 どうし たんだ。 どこ の 溝ぶ か 5 這 41 上が つ て 来た ん

だし

態は、 木戸を 全く 押 溝 から這 倒 すよう (J に、 上がって来た 11 きな り 鼠 庭 先 0) ようでし ^ 入 つ て た。 来た 八 五. 郎 風

親分、 口 惜 し e s よ 女と思って 油 断をすると、 いきな ŋ 突き飛

ば しゃが る ん だ

行 女に突き飛ばされた つ て水でも か ぶ つ のを吹聴い て来な、 馬 した 鹿 野 つ 郎 て手 柄 に な る か 4 井 戸

ヘエ

を取 正 八五 四 るような水 郎 H は返す言葉もなく井 0 寒さ · の音、 水 昼下が の音 を 聴 り 戸 端 0 11 陽 ただけ ^ 射 廻 りま は でゾ ポ た。 力 ッ ポ 身 頭 る カす 間 b なく るようで ( ) が出ます。 寒<sup>ゕん</sup> 離り

4

込ま を す で 跟っ 0 つ た 事 け 分 ら のガ た ですが 時 ん れ ラ 蔭 て で e s で ッ 八 る様 声 根 を う が ح 悧で 子 聴 e st だ う 61 あ た つ た Þ だ わ て者で な か け ら、 で、 11 か すよ、 5 念 誰 0 か た に 余 計 追 め お前さん に な 11 表を 事 か を け 見 が 5 入 に れ 7 溝 る Þ つ て か ^ つ 来 投 た ま 後 ŋ

よう う言え 何 ば、 とも言えな 市 ガ谷 か 11 厭な心 らここま 持 で、 でし たよ 始終誰 か K 9 け 7 11 ら れ る

綾之助は舌を巻きました。

が あ る П ع に 察 訪 ずれ た た人の 0 は 恐 声 ろ を 聴 *( y* 慧いがん 11 た です。 だ け で、 そ 0 後 を 縋っ け て 11 る

しな そ きゃ な ア、 事 は 飛 何 W で だ手 b あ 柄 り に Þ な ま つ た せ ん。 P 0 を 八 0 野 郎 が つ ま ら な 11 を

親 分 つまら な 11 事 は 可 哀 想 だぜ、 れ で b 杯 0 仕 を

7 た 積 り だ が

五. 郎 は ろ に 拭 きも な 11 身 体 新 11 拾れせ を 引 つ か け 出

て来ました。

精 杯 0 仕 事 ? ---体 ど  $\lambda$ な 物 を 見 て 来 た ん だし。

に 立 親 分 つ に言 そ 4 付 つ け ع ら こちらを れ て、 見 直 張 ぐ 裏 つ か 7 5 11 る 廻 女 る ٤ が あ る 向 う 0 Þ 荒 あ 物 ŋ 0 角

「外には誰もいなかったのか

犬 つ ろ 兀 11 ね 御 町 内 は ま に 太

無駄を言うな」

え、 側 後 ^ ろ か つ 5 7 首が 覗 実じっ 検ル よう を に すると、 う ع 思 つ 61 き た な が ŋ 筋造かい どう 見 附 ても 0 面ら 方 を ^ 見 ス せね タ ス

タ駆け出すじゃ ありませんか」

に御守殿に「五六町 追 つ 駆 け た が 女 の く せに 恐 ろしく 、 足が早え、 それ

崩ず 襟 脚が滅法 綺麗だ」

何? 御守 殿 崩 し?

「まさか椎茸髱じゃねえが、 間 違 (J b なく 武家 0 内 儀 だ。 年 は二

十五六、 もう少し若いか な

「それがどうした」

「段々人足は多くなる 見附を越して駕籠に でも乗 5 れ る とう

るせえ、 後ろから追 いついて、 いきなり姐さんちょ いと待っ て貰

おうか と袖を引くと振り向きもせずにあっし の手を払 った」

「フーム」

癪にさわる か 5 御 用 ッ と首筋 ^ 武者振 り付く と身を か わ 7

デンと来あがった。 そ れで 顔も 見せ ねえ ん だ から凄 11 腕 前

天下 馬鹿野郎、女に溝 の八五郎を溝 ^ ^ 投り込まれて感心する奴がある 投り込む女は、 江戸 、広しと雖っ  $\boldsymbol{b}$ たん か W

わけ は ねえ

呆れた野郎 だ、 そ れ で手掛 り b フイ だろう。 黙 つ て 正 直 後を

つけ て行きゃ 4 11  $\boldsymbol{b}$ のを」

平 の言う 0 は  $\boldsymbol{b}$ つ とも で た。 相 手 に 覚さ ら れ ず に 跟っ け 気

なったら、 思 11 0 外早く曲者 の身元 が 解 つ た か b 知 れ な 11 です。

親 分、 勘弁 て おく んなさ , , 女に 舐な め られ た 0 は 臍~ 0 緒

て 以来 だ

「嘘を吐け、 女に は 舐な め ら れ 通 Þ な ( )

ッ ^ ッ ッ、 素 つ 破抜 13 ち Þ 11 け ねえ

が う ちに 精 ガ ラ b ツ八 杯 0 陳 は苦笑い 妙 謝 打 0 ち萎れ を 持 で な た 姿が が ょ **う**。 5 物 ピ の哀 膝 3 つ コ れ リと 小 を覚えさせます 僧 頭を下 が ハ げ 出 ま て 道 これ

Ξ

乗 コ ソ 込 コ み ま ソ探索する 次 た。 は ガ ラ 必 子 ッ 要は 綾之 八 を伴 助 無 か が れ て、 つ 曲 た 者 時 の に を で 跟っ 移 す け ざず 5 れ 御 た 納 ع す 戸 町 る ٤, 0 隠 色

江 あ 合 戸三名 ŋ は 道 庵 町 中 は 御典医 医者ながら苗字帯 医 に b0 御 一人と言わ 呼 で は 出 あ が り 'n ませ あ るほ 刀を許され、 つ て、 ん ど が 簾れん `` の 外がい 人 、物でし から 様 御納 0 糸脈 御 戸町 た 声 を引 掛 に り 門 で 戸を張って、 となどが 万 0

定ま き ぐ ŋ れ わ 早 る れ て てお 美 縁 お 妻 絹  $\boldsymbol{b}$ に りま な く は 死 父の 生 別 す れ ( J 仕込 て、 立ちまし みで 歳 家 族 0 春ま たが、 は 女ながら本草学に 一子 で |綾之 父道 白 庵 助と、 歯 0 0 註文が 美 しさ そ 詳 0 を む 姉 山 4 つ 0 上 か お 手 絹 世 円 0 す で

分限と言い せん 籠 釣 狐 5 乗込 せ まま 昨 7 つ 迎 わ 夜 で て Ź 行 れ れ 亥ょ 出 刻っ た た っ た 平 に 掛 よう 来 伊 時 け 勢 た ま 分 次 な 0 屋総兵衛 に 顔を P で、 たが 麹 何 道 町 三丁 庵 て戻 か か 後 ら、 ら手を は か つ 取るもの 目 5 て来ました。 急 0 薬 付 病人 雑 箱を持 榖 け P が 屋 て 取 ある 11 で つ り敢えず、 11 て か か 山 行 らと、 見 つ 当 手 た 切 駕籠 そ 付 つ き て を

伊 勢屋 に は 病 人 P 何 に b な 道庵を呼 んだ覚えは 勿 論 風か 邪ぜ

薬を買 った 者もな e st の に、 松 0 内から薬箱を持ち込まれ て 以て

外 0 嫌 だ つ た のです

綾之 不 ·思議 さて 助 は な 0 姉 医 弟は 者殺 -と気 居ても立 しの三人目 の付いた っても の 0 は 犠牲者に選ばれたと判ると、 もう真夜中過ぎで ( ) られませ ٨ た。 父道 お ()庵が

る た。 H 0 姉 弟 0) 昼頃、 打合せた上、 お 面ぬん 平次は の安 の 縄張を 柳原 弟の綾之助が銭形 で殺され 承 知 0 た伊 東参竜 の平次を つ返事 の 訪 始 で 飛 末 ね た ん b 付 で 0 来 は 11 そ 7 0 な 翌

「駕籠は町駕籠でしたか」

平 次、 お 絹 引逢 わ せ てく れ ると、 挨拶 b抜き に 6 な 事

訊きます。

足も 町 駕籠 思 0 11 ょ う 立 に 仕立 派 だ て つ たよう て 来ま で し 御 た が 座 4 ま 後 す で気 が つ く ٤, 道 具 P

歳と み 贅沢ですが ·です。 お 絹 理 う は に 取 知 して 乱 的 時 した中 なところ め は、 流行の 少しふけた方 に *p'* のある 医者 才女らしく 娘 の娘としては、 で つですが、 した。 ハキ 絹 充分美 ハキ答えま 騒ぎの に 制 物の は 中 少 ( ) にもよ うちに 平常着 た。 も何

提灯の紋は?」

を包 そ ん れ でも P 見ません ·思議 でし は な た。 か つ た P 0 つ ع で b 御 昨 座 夜 11 ま は す あ 0 風 で 手 拭 で 提灯

「フーム」

平次は唸るばかりで

す

親 分、 お 願 13 で 御 座 います、 日 も早 探 出 て下さ

P が 正 りませ 月三日 付かず、 取 気象者 弟 て、 ん。 達、 世間 江 出 平次もすっかり腐 お絹も、平次の手を取らぬばかりにこう言うのでした。 往来で駕籠を見かけた人を捜すことなどは、 戸 入 の者、 は次第に静 の街でも、 一と通 思 か り になりましたが、 ってしま いも寄らぬことです。 調 べましたが、 いました。 道庵 なん そのうちに松 の手掛りもあ の行方は 時 見当

ずに 平次、 な った 医者殺 事 は、 殿中 の下手人はまだ判らぬ 0 御 噂にまで上 つ か。 たそうだよ」 一色道庵 0 行 方 知 れ

うよう 与力 に の笹 な 野新三郎は、 りました。 平次を激励するともなく、 こん な事を言

れ ります が もう三日 ば か ŋ 御待 ち 下 さ 11 ま

たのです。 時逃れと解 つ ても、 平次はそう言うより外 には言葉もな か 9

悄然として て 八 堀 か 5 帰 つ て来ると、 ح れ P

るには

相違あ

りません

が、

物

に遠慮

のな

ć ý

ガラ

ッ

八

が

真

剣

に

心

配

41

にな 「親分 銭形 つ た日に 0 もタ つ か ガ Þ りしておくんなさ · 全く、 が 弛る みは 風邪も引 しな 11 か けねえことに e s って 世間じゃそう言 ね。 江 な 戸 中 りますぜ」 0 医 つ 者が てます

「馬鹿野郎」

殴 な は ŋ 厶 ません。 ズ 厶 ズす る 程腹を立 てまし たが、 さす が ガ ラ ッ 八 を

四

「親分、一色道庵が帰って来ましたぜ」

何

は盆と正月が 刻御納 戸 町を通 つ た いから、 ちょ e s と覗 11 て 見ると、 色

一緒 に来たような騒ぎだ

りゃア不思議だ。 兎に角行 って見よう」

名 物 の空 次はすぐ の風 に、 飛出 頬も鼻も、 しました。 千切れて飛びそう もう戌刻過ぎ、 夕 方 な寒さですが、 か ら 吹き始 め 平

次の探求心は反って火の 如く燃えさか ります。

親 分、 早え足だな ア、 そん な に急がなくたっ て 大丈 夫だよ

色道庵は、 向 うから駕籠で送 ŋ 届けられたんだから、 当分消えて

無くなるわ けは ねえ」

無駄を言わずに歩く  $\dot{\lambda}$ だ

だって、 考えてみるとあっ はまだ 晩飯 あ ŋ 付か ねえ、 無

駄も言いたくなるじゃありませ ん か

第一 助 か つ て 帰 つ た にし ては、 あ 0 医 者 の浮 か ね え顔が 解げ せ

ねえ」

何だと」

一色道庵は家 ^ 帰 つ てもろく に 物も言わず、土壇場に 据えられ

たような陰気な顔をし て いるの は どんな訳 でし よう、 ね 親分」

フー それ は不 ・思議だ。 何 か 深 · 仔 細 い があるんだろう、 急ご

うぜ八」

「だがネ親分、 あ の お 絹さん بح か言う、 お嬢さん はた 11 た 容 貌

それに確し り者で、 学問が あ

つ

つ てるよ」

そ な 事を言 e s な が 5, 二人 は 鉄 砲 丸だま の ょ う に 色道 庵 0 を

潜 ŧ は ガ した ラ ッ 八 が 言 つ たように 盆と 正 月 が 緒 に 来 たよう

ŋ

ぎ、 平 次 は ガ ラ ッ 八 を門弟達 の部 屋 に 残 て、 取 り 敢えず 色道

どこ 庵に逢 隠 って見ました され て e st た が、 か、 その事に関す限りは、 木 ったことに 誰 にさらわれて、 一言も漏り しません。 + 日 の間

平 親 分、 留守中 は 大層御 世話 にな ったそうで、 お 礼 の 申上げ

よう あ りません。 お蔭で無事に帰 って来ましたが、 いや訊

11 て 下さるな。 どこに何をしていたか、 そればかりは言えません」

八 度 話 襟 に が 埋 急所に触 め て、 田螺のように れると、 分別臭 押し (J 五十男 黙 ってしまうの 0 坊主頭 を、 です。

見 兼 ね て 口 を添えます が、 色道 庵 0 顔は 困惑 硬 張 るだ け 何

平

は

( )

ろ

いろ手を尽して問

e s

試みました。

娘の

お

絹も見

役に も立ちません

から、 え た た事も漏らさずに、 れ 始まるか、 じゃ通 そ の れ とこんな噂もあります。 言 は 料簡違 う りません。 11 も言 ずれ毒でも で b なき わ ( ) じ ぬ や、 bÞ 大事が起っ 盛らせる積 勝手とは あ -お上の方に 謀叛が りませ を 企<sup>た</sup>く た時 万一謀叛 思 6 らん には、 りだろう。 か 11 な 0 はどう さる 悪 でいる **从に荷担**かたんかたん 本草学者を三人も 11 な ことをした覚え だろうが ると 大きなお 思 ある て、 e s 家騒 ま 世 に す 見聞 違 誘ど げ 動 拐か で な 4

九 その 族根絶や 時、 一人や二 K な つ 人 て 腹 からでは を 切 ったところで 悔や ん でも追付きゃ 申 訳 が 立 ちま しませ ょ う

驚

色道庵

は、

声を立てる暇

P

な

そ

の

縁

0

上

^

引

上

げ

5

平 次 の言葉は急所を突きました。 『謀叛』 ع 聞 くと 色道 は

サ ッ ع 顔 色 を変えて、 静 かに 四 方 を見廻 な が 5

「申しましょう、――こちらへ」

言 葉 少 な に 平 次 を 別室に導き入 れ ` 改 め て 四 方 に 気 を 配

自 0 胸 に 手を 置 て、 朩 ツ ع 溜息を 吐きま

五

蓼白、 覚悟 身 か らこちら 平次 0) を で しま 0 伊東参竜両先生が 親 へ送 す 儘 分、 虫 たが、 り返され 0 私 よう は 世に に 不思議なことで ました。 打 も不思議な目に うち殺さ 殺された事情もよく れ し か る Ĺ 命を か 遇 そ 何時 助 e s れさえ か まし また り、 解 ŋ た。 解 伴 ` ど う 私 ら れ お て Þ b な 蔭 行 無 5 61 で か 11 本 細 れ う 命 田 る Þ ع

一色道庵の話は怪奇を極めました

こうです。

た。 付 道庵を乗 け 正 月三 る 御納 筈 せ 戸 日 で ると、 す 町 0 が か 晚 5 麹町 厳重 P 伊 勢 0 三丁目までと言うと、 に垂を下ろ 0 屋総 半 刻あ 兵 衛 まりもグ か して、 5 0 迎 滅茶滅茶 ル e st グ と言 ほ ル ん 廻 つ 0 に 9 て 駆 7 来た ع け 息 出 駕 で まし 駆 は

「これはおかしい」

数す 中 寄き ع を 思 凝 軒 つ た ら 屋 時 し た そ は 家 れ 0 は まる 庭先 1 度 つ 大 き ^ 担ぎ 名 り 見 0 入 下 当 れ 屋 b 5 敷 付 れ 0 か 離な て ぬ 4 屋れ 家 た ع 0 0 11 前 で つ す。 た 深 小 11 木 さ 立 が 0

だ 声 れ ま つ を た した。 0 で た す。 とこ 四方は深い ろで、 木立、 誰 も救 右も左も大きい i s に など は来 て **<** 屋敷続きで、 れそうも な 少 11 場 位

の立派 正 7 こちらを 面 Þ な は 7 き 動い 人物 気 眺 が が 付 め 0 坐 大 7 く り、 火鉢 ٤, ( ) る 脇息 0 <u>^</u> 眼 で 0 に 凭<sup>も</sup>た した 銀 前 0 0 れたまま、 網 障子 0 の上から手を翳<sup>い</sup> は左右 寛達な微笑をさえ浮べ に 押し開 して か れ <u>F</u>i. ました 十年輩

ら挾ん した。 ハ で、 と声を立 61 つ 道庵を護 の 間 にや てようと 5, つ て する ( ) 鬼をもひ た ٤ 0 です。 し 左 ぎそうな武家が二人右と 右 0 手 を 取 つ て 引 据 Ž 5 左 か ま

褥を取らせえ 色道 庵 ょ つ た、 苦 ゆ うな 11 ` 即 で答を許り す ぞ そ れ か 6

的 微 笑を送る 0 で した。

主

は

鷹揚に言

つ

て、

人

に

反抗させ

ぬ

微

笑、

持

つ

て

生

れ

た

圧

倒

そ の Þ 中を探 がて、 つ 主人は手文庫 て、 薄黒 い梅干 0 中 ほ から、 どの 丸薬を取出しました。 畳紙に包んだ錦 の袋を出

を書 5 道 ぬ が 庵 いて貰 出来るだけ早く、 ここまで来 4 た e s 0 じ て 貰 や。 つ た この 褒美 の はこ 丸薬と同じも は望み次第取らせる、 れ の為 じ や。 のを 作 何 ん に ち ŋ と そ H 0 限 が 処方 万 は 切

同 道 庵 を は 作 ヒ ヤ り IJ か ع ね て、 しま した。 さ 0 本 儘殺され 田 蓼白や伊 て しまったの 東参竜は、 で ح 0 丸薬と

「よいか道庵」

3

そ

0

儘

帰

さ

ぬ

ぞし

て、 13 思 わず b 9胴顫を、 いもあ ŋ しまし ません。 た。 道 庵 はその 不思議な 丸薬を取 り上げ

で 見 丸薬 は 鼻 作 で 嗅 つ て 11 か だ 位 5 何 で は 年 経 と て つ bた そ か 解 0 5 処 な 方 が 11 ほ わ بح か 古 ŋ ま 11 b せ ん の で 眼

ぬ そ 0 丸薬は そ 代 手 ŋ 同 元 に b 七 0 つ を あ 作ら る な け つ だ れ ば け は な 噛 ら ん ぬ ぞ で ょ 砕 11 11 か て b 構 わ

主 は そ う言 つ て な ん O<sub>b</sub> 婚がなり り P な = ヤ IJ ع ま た

た ま つ三 0 ŋ た。 色道 で つは た が、 た 庵 つ た二 は そ 七 年 数 H 0 つ 経 0 0 ままそこに 違 為 つ に つ て 変質 b た原 止 料 十 て、 を H め 経 置 発 見 何 か つ ع れ 7 *p'* た て ても だ 蓼白 け 丸 解き 薬 で 分析がある ょ 参竜 相 う 変 が 5 が に 没 ず な 解 頭 か 11 3 た 9

道 き 武 家と 庵 ŋ 林 姿を見せません 0 何 中 凄 の 応 おり 0 e st 不自 ほど美しい女と、 は 由 大き もさせませ な で したが、 屋 一敷と ん。 垣 下 待遇は実に至れ 女が二人いるだ つ 隔於 7 た だ け り尽 で け。 主 せ 日 頃二三 ŋ はそ で、 色 9 0

示 H 経 た 丸 ち ま 薬 0 た。 成 分 久し ع 11 振 う り 0 は で庵を訪 人参、 ねた主人 松樹甘皮、 前 胡ご 麻\*~、 薏苡仁 一色道 庵

甘草の五味だけ。

を 併 せ 参 ع 7 薏 作 苡 9 た 0 解 0 じ つ や た 0 残 は ŋ 手 柄 0 で あ 味 は つ た 何 で あろう」 が そ 0 丸 薬 は 味

主人は大機嫌でこう言います。

下 さ れ な ば が 5 心 永 ح 0 研 丸 薬 究 を を 重 粒拝 ね 残 借 る て、 味 を 御 相違 納 戸 な 町 0 見 自 付 宅 け 帰

りますが――」

う 「ここでは何分道具薬品などが揃 いません。 如何で御座 いましょ

よい 解きお 言も 「それ か 漏ら では わ して つ は 一応 たら合 な 5 御納戸町 ぬぞ。 図をい たせ、 そ へ帰すと致そうか。 0 丸薬の秘密向う一 早速 迎 ( ) の者を遣わすであろう、 その 力 代りこ 月の 間 0 に 事を 解き、

服 堅 一い約束。 て送り還され 道庵は て来た め でたく自宅へ の でした。 帰る嬉しさに、 な に b も承

### 六

 $\lambda_{\circ}$ 付きます。これでも謀叛や悪企みと関り合 人を殺すほどでない 親分、 丸薬は幾度も舐め試みましたが、 こうしたわけ、 のは確かで、 私にはなんの事やら少しも解りませ 残る二味も、 毒薬が入っていたにしても、 ( ) になるでしょうか」 私には大方見当は

色道庵は全く不思議でたまりません。

そ の 林 0 中 の庵と いうの は、 どの辺に当るでしょう」

と平次。

「それが少し も解らな e st 0 です。 道順 の様 子 では 麻 布 か 赤坂 と思

いますが」

「家具類、 例えば火鉢とか膳とか、 長が押し とかに 定紋 のような

ものはなかったでしょうか」

手洗鉢も膳椀 も紋 も気を のある Į, 付けましたが、 のは出しません。 その 辺の店にあり合せの品を集めたもので 長 押 b0 つ 金 とも主人の殿が 具は 剥ぎ、 襖 0) 用 引 いた火鉢だ

日

めら

れ

たそう

で御

座

います」

でよ け 要心深 は、 は一度毎に隠しましたが、 らくは判 抱き茗荷の いく 中を 巻 りませんが、 のような、 いて隠 してありましたが、 何でも変った紋所でしたよ」 鱗のような、 なにやら蒔絵 二つ菊のような、 なに の紋があったようで、 か の 機<sup>は</sup> みで見えた

「言葉の訛りは?」

女共は 間違 4 もなく京言葉でした が、 武 家と主人の 殿 に は 奥

州訛りがあったように思います」

どうぞ、 Š 御 私 座 いから聴 11 ました。 ( ) た事 それだけ は 内 々 で に 大 方 置 見 当 11 て が 付 下さい きま 0 又どんな う

仇をされるかも解りませんから」

「それは大丈夫で御座います」

平次はそこそ ح に 暇乞 いをすると、 夜駕籠を 飛ば 真 つ 直

ぐに八丁堀へ。

事 が 御 御 座 さ います。 · 1 天 下 神 田 の 大 の平次が 事 旦 参っ 那 様 たと仰 K 御 目 に し か Þ か 9 7 9 下さ て 申 上 げ 61

真夜 中 の 笹野新三郎 0 門を叩きました。

に 何だ平 叩き起され 吟味与力筆頭、 次、 て、 夜 0 若く た 明 ( ) け て俊敏な笹野新三郎 る た不平ら のを待ち兼 し e s ね 顔 るほど もせず は、 0 に起きて来ま この自慢 大事が あ 0 る 岡 0 の引

旦那、どうも謀叛の匂いがします」

「何?」

丸薬 ح れを召 同 上 物 を が 作 つ て れ と言 御鑑定なす わ れ 林 つ て 0 下 中 さ 0 大名 11 まし。 の下 屋 敷 色道 0 庵 離 屋 は 0

「フーム」

殺 で。 合され 味ある筈だと言 たそうで 本 田蓼白 毒草鳥兜か 色道 る か 御座 5 庵 と伊東参竜 は そ 家 います」 鳥ぅ ( ) 0 ま 上 帰 頭だろうと申 す。 つ の見分けた成分は、 て 参と薏苡仁を見つけ 研 道 庵は 究すると言 しますが、 多分田螺を干して つ て、 松 それ たそうで の甘皮と 首 尾よ を 打 ち明 粉 胡 す 麻と 送 末 が け ŋ 還さ 甘草 した P う

平 次 話 は、 事 毎 に 新三 郎を 驚 か ま た。

平 次、 そ れ が 本 当 な 5 大変な事 な るぞ」、

エ

丸<sup>がん</sup>とも 。 お 前 は 知る 秘薬だ」 ま 11 が ح れ は 陣 中 0 の兵粮丸、 に 避穀丸とも兵 利的

ヘエ

11

う

蝮蛇、 0 の兵 「兵家、 餓を救うと言 茯苓、 仁術家は皆 南天の実、 中 わ 半兵衛 れ て 知 e st つ の兵粮丸など言うも る 白ぱくろう ている筈だ。 虎 の肉などを用 遠きは義経 0 が 41 あ る。 兵粮 丸よく 丸、 兵 楠 H は 氏

エ

平 次は 開 11 た П が 塞が りません。 全く大変な事にな つ て しま 4

ま

う 11 ざ鎌 東 照 は ど 権 倉と言う  $\boldsymbol{b}$ 現 そ 様 0 御 嵵 製法を に 統 備 0 え 知 5 7 は な e s る 11 各 が、 0 藩 が常だ。 兵家本草家 これは秘 天 下 中 に 知 0) 兵粮 極 名 秘 の兵粮丸と 丸 で、 を 家老用

江 西 州 条、 0 彦 根、 羽後 越 0 後 秋 田 の高 田 上がずさ 南 0 大 部 多喜 0 盛 岡、 長 岩ゎ 州 代る 0 山 П 本 越前 松 伊 0)

信

様

に

間違

11

は

御

座

13

ませ

ん

井、 紀 州 の 和 歌 山 常 陸 な 0) 水 戸 ``` 四 玉 の 松、

守 に うるも 心 ŋ な どが 掛 0 け 藩 外 あ て る。 に 11 11 ろ は る 処 e s 牛 法 ろ 肉 あ を用 は 申 る うる が すまでもなく  $\boldsymbol{b}$ 11 ずれ 0 も藩 勝 栗を 兵 0 粮 運命を賭 用 丸 う るも 片  $\boldsymbol{b}$ け 0 出 て b 白 さ 秘 梅 密 よう を を 用

笹 野新三 郎 の説明 は す つ か り平次を仰天させま た

誘ゥ 拐ぃ 持 W する つ てそ ٤, 11 る 大名 れを作る積りでしょう。 Þ は が り謀叛も 兵粮丸を手に 0 ですね。 れる これは 麻布 かどう 赤坂あ 日 P か た 油 りに 断 て が 下 な 本 ·草家を 屋 ŋ ませ 敷 を

ろ で 平 次 ど 0 藩 が そ ん な 事 を 。 企<sup>た</sup>く ら ん で 11 る か 見 で

もついたのか」

と新三郎。

州能なま ŋ 0 あ る 大 名 ح 家 来 で 女 中 に 京 女を 使 つ て 11 るところ

と言うと、 す 判 ŋ そうじ Þ 御座 11 ませ 6 か 旦 那

「フーム」

紋 所 は 抱 き 茗ェ 荷が 0 よう な 鱗さ 0 ょ う つ 菊 0

下屋敷が麻布か赤坂――ああ判った」

「何が判ったんだ、平次」

間 違 13 つ は あ り ません 0 南 部 で 御 座 11 ます

「南部」

で京 ま せ 御 女を御 領 地 か は 盛 使 そ 岡 4 0 に 上 で 十 な お 万 る 下 石、 屋 敷 色道 南 麻 部 庵 布 大 膳 南 0 逢 大 夫様 坂 つ た で は向鶴 0 は、 召 使 南 女 0 部 紋 中 大膳 に は Þ 御 御 夫重 座 自 慢

# フ

そ 誘 拐 て 笹 が 野 兵粮 て二 新三 ع 人 は 郎 丸 ま 思  $\boldsymbol{b}$ 0 で 秘 ح 11 もよ 殺 密 W を な し 解 ら た に 驚 な < 0 か か は 11 た 5 つ こ と た < 容易 ŋ 0 で、 な が で す。 あ ら 南 ぬ ŋ 陰は誤う 部 ま せ 大 膳 6 ح は 大 思 夫 本 草 に 11 家を 疑 ま 11 が 向

派な兵粮 早速産 げ て れ ح 丸 れ 夜 が 口な 平 0 伝 次 明 0 け 評 わ 定 P つ ぬ て う 間 所 11 少 に ^ る 討 し 11 箸だ。 後 手 ら を 先 つ 差向 を考え し 数あ ゃ け 11 羨ん る て ら ませ 兵 望す 物 れ 粮 を言 るよう 丸 御 老 0 う 中 ち に 南 で 部 ح 家 0 旨 を 南 は 部 立 申

## ヘエ

何

'を苦

ん

で

古

11

兵

粮

丸

0

分

析

をさ

せ

る

0

だ

と

水

戸

0

兵

粮

丸

は

有

名

で、

大小

名

方

0

0

的

に

な

つ

7

13

る

方だ。 叛 そ な け の 7 辺 は 隣  $\boldsymbol{b}$ 藩 思 南 0 佐 部 11 竹 が 寄 様 判は 膳 5 然り ^ 大 夫 ぬ 0) 相 抑 様 わ え は か ح 忠 ら 誠 ぬ て う 0 志 ち 深 は 格 別 く 滅 0 多な 御 御 声 上 掛 0 ع 御 ŋ が 覚 は あ 相  $\mathcal{P}$ る 成 目 筈 出 ら ぬ ぞ 謀

P

次、 笹 野 新 捕 物 新三 郎 に ほ か 郎 ど け 0 読 て 言 は う W 天 で ح 下 ح 11 な 0 は 名 か 理 路 つ た で 整 す 0 然 が で す。 大 て 名 お 方 ŋ ま 0 消 息 た は 銭 形 与 平

#### 七

で は な 兵 間 粮 違 丸 避 Þ 11 一穀法と で 避ひ 穀な 昔 は 言 軍 て 陣 う 区 忍 作 術 飢 は 饉 者 荒 に 0 備 食 唐 粮 え 無 る ح 稽 為 し な て b に 必 0 要だ 各藩 0 ょ 挙で つ う た つ ば て 学 う ŋ

に研究させたものでした。

七 梅 H 中 餓ぇ は 兵粮 を 随 凌しの 分 丸が三 馬 4 だと伝えて 鹿 馬 つ 鹿 か五 11 お つで、 0 ります。 b あ 少なきは半日 り ´ます が + 中 日 八 九 は 多きは三 理 め 日 で

です。 す 0 さ せ て *( )* 唯 者 る 食 丸 糧 決 ょ 実によく 0 に は、 仕 う して出鱈目なも 0 事 に エ 麻痺薬を用 キスを取 で、 出来た 研究 ここ し のとあります。 って、 て で書き尽すに ( ) ので 11 て、 たと 少量 はなく 一時胃を欺瞞 いうこと の食用 しても ح 昔 れ 5 が で大きい 0 人 解 あ 0 す 研究 はこう ま つ る り て の は 頂 に エネ نج 重 け e st ば う 大 ル 今 力 ギ 充 な で 口 間 は 分 IJ 専 を 題 で

そ れ 降だ は つ 又筆 て天 を改 保 年 間 め に 7 書く は、 兵粮 機会 P 丸 あ に る つ で e s て 面 よう 白 11 騒ぎが あ ŋ ます が

何 兎 思 角、 ある位 わ 兵粮 な で 11 す 丸 野心家が か 0 5, 秘密 を守る あ 封建 つ たことも不思議は 時 代に、 為 に は、 人間を二三人殺すことを、 随 分 藩 な ( ) の 運 0 です。 命 を け た

まで、 老中を 心 で 動 た 虫 は ま か さ のように すことだけ り て 措き、 殺 ん。 銭形 は た 相 思 平 手 次 4 を、 正 は まりまし 笹 そ 野新三郎 0 儘 差置 た が に 止 < 江 0 め が 戸 5 0 れ 名医を二人 て、 何 辛

例 0 ガラ 朝、 ッ 御納戸町 が 旋風に へ行 のように って、 もう少し詳 飛込んで来ました。 、聴く積 ŋ で *( )* 

「何? お嬢さんが――」

親

分、

今度

は

お

嬢

さん

がさら

わ

れ

お絹さ 6 が 昨 夜 0 うちに 行 方 知 れ ずだ。 あ ん な 綺麗 な 娘 0 死体

が 弁慶橋な ん か に浮 ( ) た日にや、 天道様も無駄光りだ、 大急ぎで

か け ま う

よし ッ、 来 e s 八五 郎

を慰 め る は宙 術でも を飛 な < ん で どうする事 色 即に駆 も出来な け 付けましたが、 i s 有様だっ 打ち萎れた道庵 た 0 で

う。 ら、 外 から誘わ お 絹 は 昨夜丑刻頃から暁方まで 自 れ 分 た のなら、 から進ん 誰 で出掛けたところをさらわれたので か気が付かずに の 間に家を抜け出しましたが いる筈はあ りませんか

事 親 があっ 分、 ち 昨 夜 や、 お前 私は さん 生きて に 打 行 崩 け く 空も た の が な 悪か 11 つ た 0 だ。 娘 に 万 0

色道庵が、 平次をつかまえて、 怨みがましく言う 0 4 無 理 0)

な 事でした。

ところ で、 玄関 0 上 に ブ ラ下 げ た瓢箪 は あ ŋ Þ ア 何 0 禁児ない で す

平次は妙なところへ 気 か 付きました。

なすったの じゃ 御座 11 ませんか」

お

娘さん

が

さら

わ

れ

た

0

で

丸

薬

0

秘

密

が

解

け

たと言う

合

図

見当もつきません。 ね、 それ が 悪 11 とは言 大きい声では言えませんが、 61 ませ  $\bar{\lambda}$ が、 相手は どん な事をする気 万一これが謀叛

を企らんでいるとしたら

で 御座 いえ、 起せるわ います。 親 けは 分、 そん な 黙 *(*) つ な事は し、それに、 て私をやって下さい ありませ 私にしては娘 ん。 あ ん 玄関 な丸薬で の命が ^ 瓢箪を出せば、 謀 何より大事 叛 騒 動

そ 0)  $\mathbb{H}$ のう ちに迎えの 駕籠が来ることに な つ て お りま す

そあ 「そんな事は 行 れ怨を受ける覚えはな つ て丸 薬 あ 0 りや 秘密を奪ら しませ ん。 れ い筈です。 た上、 丸薬の 万 私 七 味を解 は行 0 事 が つ て あ 41 娘を て つ Þ た 救 れ ら ば、 ? 11 さな 恩こ

ま だ つ お た 解 絹が父親 ると、 0 です。 0 命に代る為に、 色道庵 は危険 に対してす 自分から進 つ ん か で り盲 虎っ 狼ぅ 目に の動きと な ^ 飛込 つ 7 ん

きゃ

な

りませ

ん

0 ーそ 林 平 れ 0 じゃ、 中 0 声 の庵の絵図 は たった二つ私 次第 に 面を引 小さく、 0 W 願 ゃ て見せること、 が ( ) を て 聴 色道庵 いて下さ 0 e s 耳 つ は K 何 Þ ら 9 は 11 そ て

### 八

ŋ

ます。

たさに 郎 غ 恐 れ 11 入 う 神 り ケ 田 チ ますが な か 野郎 らわざわざ参りました 御 で 用 御 座 様 ( ) ま ^ 御 す が 取次を願 御 家 غ 0 e s 、ます。 大事を 御 あ、 知 つい 6 は 八 <u>F</u>.

何じ Þ 御 用 人様 に逢わ してく れ、 お 前 は 体 何 だ 11

ガラ 今まで手 ッ 穂は 八  $\boldsymbol{b}$ 内職を な 0 間の く 伸び ヌ して 0 ッ ع した顔を e s 出 たら た 0 眺 は、 し め 4 埃を払 Þ 南 部 る の 坂 で つ 下 て、 屋 た。 敷 お 0 ょ 裏 そ胡散臭そうに 門 を預 か る

「ヘエ――、正にあっしで」

次ぐと、 正に つ 俺 て面じゃ が叱 られ な るでな」 いよ 用 事 は 何 だ 1, 滅 な 物貰 11 を

取

物貰 e st じ Þ な いぜ爺さん、 お家の大事 ってえものを教えに来た

んだし

「そうか 11 お家 0 大事 غ あ つ て は 放 つ て b 置 け Í e s • ど りや

腰を 伸 ば すと、 丁度向う か 5 中年 の立派な武家が 人、 何 の所

在 もな フラリとこ つ ち ^ Þ って来るのを見 か けました。

あ ッ 桜庭様、 丁 度 e s いところで 御座 いました。 この人 が お

家 0 大事 とやらを持 つ て来なす つ たよう で、 裏門に 立ちはだ か つ

て、 滅茶滅茶 に 小鼻を脹らませ て (J ます が

何 ? お家 の 大事? 聴き捨 てならぬ 事じ Þ 0 拙 者 は 桜庭兵介、

当南部藩の家老職を勤めおる者――」

ズ と出 ま いした。 思 慮も 分別も 腕も申 分 0 な 11 武 家 に 圧 倒 れ

て ガラッ八の 八五 郎はツイ二三歩引下が りました

ヘエ、 手前は八五郎と申しまして、 ケチな野郎で御座 11 ますが

南部 兵粮 丸 0 七味 はよく 存じております。 人参、 甘草、 薏苡仁

それ 胡 麻 と松 の 甘皮、 そこまでは誰でも解るが、 残りの二

味がむずかしい」

何 を言 わ れ る 0 や、 飛ん で b な 11 0 南 部 兵粮 丸 は 藩 0 秘

密 日で処法 は 御 国許宝蔵に什襲 てあ る。 拙 者 如 き 0 知 るところで

はない」

桜 庭兵 介 b す つ か ŋ 煙 に 巻 か れ た 形 で す。

御家老 0 お前 さん P 御 存 じが な 4 工 すると、 残る二 味

を申上げ て b 向 面 白 < は な 11 わ け で

「左様」

少 お か しな 事 K な つ た ぜ、 ね、 御家老様、 今殿様はこちら

か

11

褪 の御下屋敷にいらっしゃるんです

そ は申上げ兼ねるが、 見らるる通り裏表に 門番一人ずつ、 拙

者 成程、 が 時 々 ここに 見廻りに来る位だから、 は いらっしゃらない、 大方お察し と仰しゃるんですか、 もつこう

工 ところで、 一色道庵 0 娘、 お絹と申すの がこのお屋敷 に お

りま しょう」

4 Þ そのような者 は おらぬぞ

おか いなア、 それじゃ本 -田蓼白や、 伊 東参竜を殺 た 0 b 御

邸 0 や な ( ) と仰 し やる ん ですね」

断 をすると 八五 郎 は遠慮を知 もなく、 ツイこん りませんでした。 な事まで 穏当 ツケ な桜 ツケと言 庭兵介 つ て の 調子 しま た 油

0 です。

無礼者 ッ、 何を申すッ」

ヘエ

先程 か ら黙 つ て 聞 11 7 11 る ٤ 放<sup>ほ</sup> 図ず bな 11 男 だ。 殿 を 初 藩

の名に拘る事を申すと、 そ 0 儘 に は差 許 さんぞ」

成 敗 て 取 5 せる、 そ れ ^ 直 れ ッ

桜庭兵介 が鯉 口をブ ッ と切 ると、 八 <u>Fi.</u> 郎横 ッ 飛びに 五六歩、 早

く 門 0 外 ^ 飛出 して お りました。

で ょ う。 ح ん な事 で首をチ  $\exists$ ン 斬 ら れ て たま る b W Þ

な , あ ば よと来た」

尻を端折 る と後をも見ずに、 サ ッ ح 文字 に逃げ 出 ます。

爺や あ れ は 何 Þ

気違 W で 御 座 11 ま しょうよ、 別 段 飲 ん でる様子もな か つ たよう

ですから」

門 す。 番と家 顔を見合せて笑 e st まし た。 まことに天下泰平 図

九

柄

で

係 ح が ガ あ ラ に ッ 南  $\boldsymbol{b}$ 八 部家 0 の とすれ 報 は 告 関 を聴 係 ば、 くと、 桜庭 て *( )* 兵 な 平次の 介 ( ) ように は 日本 頭<sup>ぁ</sup>たぉ b は 思 0 i s 喰 わ ろ わせ者 れますが i s ろに です 働きます。 b 関

٤, 東な 対 ことに二つ 11 位正 に な は れ 林 11 反対 左、 手 って 配 で の 置 引 に 袖 11 な 図 る いた、 色道庵 垣 外観、  $\boldsymbol{b}$ 面 0 つ て です。 0) e ý の描 障子も、 外観が、 南部家下屋 る 構造、 道庵 の いた林中 は、 鏡 実 縁 0 敷 側も、 に 見取図 ^ ょ の応じまり 映した実体と 体何を意味する 0 横手 は そ 似 の 入 見取 つく て に あ 口 が お り る 図 ŋ Í 離 そ 右 眏 ٤, す 像 な 0 れ 0 儘 が ガラ で 0 0 0 しょ よう 図を と言 に ッ 不 八 思 比 う ガ つ 正 て ラ が 覚 反 な ッ 61

せん。 薄 あ が ح て 行 明 れ 駕籠 0 り 道 出 道 上 0 庵 街 は 来 に 々 な を行 付 最後 刀 0) 駕籠を 添 か 平 0 次 の つ つ つ て来 た た 手段と に 0 道 跟 の 0 知 で、 た です。 恵 庵 け して、 で を れ 平 ば 人 残 刺 b 次と雖ども、 す 0 武 積 つ て 士は、 と簡単に曲 行 色道庵が り ら つ た栞を 下^ ` 手た 今 者 日 に 探 迎 鯉 駕 ば す の П 11 策さ 籠 か を 0 を が 駕 切 り り 籠 跟 解 は つ る て、 は に どうする ける者が 筈です あ 揺 まだ ŋ ら ま れ

垂を 付 添 下 色 11 道 ろ 0 眼 庵 を忍ぶように、 は て 11 膝 る の 0 上 で に 載 どこを通る せ 道々 た薬箱 往 来へ か の ら、 撒 か 見当は付きませ 11 て行きま ع 掴 み 0 した。 を ん 出 駕籠 が 屝

木 往来にこぼ ح ま は 出 で の方に商売用の水牛の匙を挾んで、 辿り着きました。 来 た 0 した糠をたよりに、 で す。 平次はその後を追 それでも、 いました。 糠をこぼして行く位のこ どうやらこうやら六本 駕籠を見失うと、

た を 舐<sup>な</sup> 駕籠 めるように、 はもうどこへ 僅かに 行 つ た 残る糠をたよりに か 解 りませ  $\mathcal{K}_{\circ}$ 提 来ると、 灯 で 照 な が ら 地

野郎 ッ

不 意 に 棍 棒 が 耳を か す めます。 提 灯 を 叩き落され た の で た。

あ ッ

棍棒 顔を挙げると、 とと当を、 中 何時の間に集まったか、 には二条の白刃さえ交えて、 三方 か ら五六人 0 数

えー

膾になれと斬 りか か ります。 平次は鼬の のよう に飛退きました。

何を しやあがる ッ

黙れ つ

キナ臭くなるよう な襲撃。 平次はもう 度白刃をか わ すと、 身

を で るがえ て 五 六步。

逃げるか平次」

何をッ、 これで b 喰え ッ

て、 懐を探ると、 ピュ 取 ピ 出 ユ し た ع 0 得意 は青 0 銭 投げ が 五 一六枚。 銭 が夜風を剪 枚 ります。 枚 を П で

「あッ

やら ħ た ッ

二三人は 額を割 られ しまいました。 た様子、 たじろぐ隙に平次は、 身をか わ

て街の宵闇 に隠 れ て

ません。



し平次の方も大手ぬかり でした。折角知恵を絞った糠婦 0

*p'* 夜道ではあまり役に立たず、 そのうちに空っ風が吹いて、 明

日をも待たずに吹き飛ばされてしまったのです。

翌る朝、 色道庵の死体は、 南部家下屋敷の門前 に捨ててあ ŋ

ました。

際で、 左肩口か 筵を掛けたまま、役人と門番の老爺が見張ってお 平次が らた 飛んで行 った一と太刀、 った時はまだ検屍 大袈裟に斬っ も済まず、 ったの は 門 凄 ります 0 ( ) ほど 側 寄せ の 手

すが、 番家老、 桜庭兵介 応死体を見せて貰った平次は、 前に変死人があ に逢って見ようと こちらは 町方の 御 つ 思 用聞風情、 7 は、 いました。 留守居の重役、 丁度下屋敷に居合せた家老 あまりに身分が違 方は十 方 知らん顔も出来 石 0 大名の二 い過ぎま

©2017 萩 柚月

ŋ で 平 は ع な Þ 11 5, 何 困 ع か つ た 早 事 が 取 片 起 付 つ た け て b 貰 0 じ 11 た や 11 当 が 家 の迷 は ع 通

ま 荒 桜 庭兵 つ う B ح 介 11 思 ぼ か 11 ع て 0 思 お 外 手 り 11 ま ま 軽 す に 隔だた 平 た が ガ 次 ラ を 会 ッ 呼 八 び つ を 入 7 み 脅 れ 話 る か て ع 思 た 縁 様 に 11 腰 子 0 外 を で は 掛 練 け た か な ま

恐 申 れ ま 入 す り ま が す あ  $\boldsymbol{b}$ 0 う 死 す 体 ぐ が 取 あ 片 つ た 付 ば け ま か よう。 に 御 御 迷惑 家 掛 は 万 る 重 御

間

岡

9

引

風

情

K

何

0

りも

な

<

ح

う

か

け

ま

す

疑 *( )* が 晴 れ ま た

そ は 体 何 0 事 Þ

よう れ 出 仕 た 0) 上 向 本 草 け 家 後 て ろか をさ お ŋ ま 5 ら す つ 刀 7 昨 殺 に 斬 夜 P た ŋ 捨 曲 色 7 道庵 た は 0 を は 御 わ 当 そ ざ 家 わ 0 ^ ざこ 疑 為 で 11 御 0 ま 座 か か 伴 ま る

フ

た

あ 0 手 際 は 見 事 で 御 座 11 ま す

余 0 腕 利 き で あ ろ う 八 丈 0 重 ね 着 を 枚 0 皮ぴ に

斬 つ て あ る

閉 ŋ ぬ 11 出 る か め ŋ ま た ろ で で ま 御 が P 御 座 座 0 で 外 な そ 15 11 ます」 ら、 で ま れ 斬 ほ ど あ た 9 た れ 0 だ \$ 門 腕 け 利 0 0 に 屝 き 相 に 0 近 違 飛し 御 沫ぶ お で 座 11 斬 家 た 11 ま 裏 る 血 為 せ 門 潮 前 に  $\lambda$ で 見 は で 御 斬 ま す 屝 つ 家 を た 開 か 0 5 け は 送 手 を

桜 庭兵介 は 唸 りま た 南 部 家 に 対 す る 疑 11 が 晴 れ た喜 び

岡 つ 引 の 知恵 の逞ましさに驚 e st た のです。

ろで つ か ぬ 事 を 伺 いま す が 御 当家 0 兵 粮 丸 処法 が 紛 失

たことは 御座 (J ますま e st か

平 次は いきな り話 頭を転じました

つぞ や Ŕ そ の 様な事を訊ねて来た男が あ つ た が 南

兵粮 丸は天下知名 0 秘薬じゃ。 臣下と雖ども濫 りに知 ること 相

0 であろう」

成ら

殊に、

泰平

0

今日、

兵粮丸などはまず世

に出

ぬ方

が

恐 れ入ります

御 領地盛 岡 の不来方城宝蔵に け襲し てあ る が、 そ れ が 何 か 致

た

いえ、 ところでそ の兵粮丸を 用 i s ら れ た 0 は、 何 時 0 で

御 座 いまし よう。 一番近 e s ところで

た時、 左 様、 南 近頃はト 部 0 福 岡 ンと 城 聞 で 用 か 4 ぬ が、 たということ 天正 + 八 が 年 伝 に わ 族 つ 7 九 *( )* 戸 る 政実

どなた が 用 4 ま した の で

攻 手 は 南 部 藩 に 仙台 会 津 0 援兵二 万 人 11 う 大 軍 だ が 兵

粮 b 充分あ り、兵粮 丸 0 世話 に は ならなか つ た。 敵 は 謀 叛 人の

あ 戸 政 実 族五千人、 兵粮 丸 福 を 岡 用 城を死守 11 た ح とと したから、 思 う。  $\boldsymbol{b}$ そ つ の 時 兵粮 城 中 丸 貯え 7

ع

P

岡 0 7不来方城、 か ら 度 b出 した事がない」

九戸 政実 0 族 はどうな りま した」

死 ん だ よ。 城 中 0 男女数百人を櫓に 置 いて自ら火をか 党

類三十 余 は誅せら れ て首を京 師に送っ た とあ る

そ 九 戸の 一族で今日まで生き残る者 は 御 座いませ ん か

何 分 昔 0 事だ。 今生きて 41 ると皆百歳 以上だろう b つ

その子孫はないとは申されぬが」

桜庭兵介 は 間 わ るるまま に 藩 の歴 史を語 ります。

に 南 部 藩を怨む 者は 御 座 ( ) ま せん か

な *( )* 11 Þ 心 当 り が な 11 と言 つ た 方 が 宜 か ろう」

「大膳大夫様とお仲の悪いのは?」

大きな声 では 申 さ れ ぬ が • 津軽越 中 守 様 じ Þ

相 馬 大 作 0 騒 ぎを起 た 南 部 ع 津 軽 は そ 0 頃 か ら な ん لح

なく犬猿 0 心 持 で 睨 み合 って来た 0 で す

恐 れ な が ら、 御 下屋 敷 0 中 わ け て も御 庭を拝 見 11 た とう 御

座いますが」

平次は妙な事を言い出しました。

な 5 ぬ ところだが 当 家 の迷惑を 取 除 11 て く れ たそ 0 方 0 為

案内して取らせる、こう参れ」

桜 庭兵介 は気さく に立ち上が り、 平次を 伴 れ て 霜も 枯れ 0 深 15 庭

を あ つ ち、 ح つ ちと案内し てく れま

X

X

が 詰 す 惧 <sup>ぉそれ</sup> めま そ 0 が H た あ 0) 昼頃 る 釆は 0 配い で 精鋭 を 揮 わ をす ざ つ た ح ぐ 林 0 は つ 0 与 た 中 力 大 捕 捕 0 物 笹 物 野 陣 に (新三郎、 が、 真昼を選 犇 々 夜 ع W 南 は だ 曲 部 |者を逃 坂 に 取 銭

形の平次の知恵だったのです。

取 肼 W だ 0 は 南 部様 下屋敷左 隣 に 僅 か に 垣を隔 て て 建

つ

た

そう

お

絹さ

6

0

敵

だだ

屋 対 林 敷 中 ·の庵ぃぉゥ 0 中 つ た で、 0 建物と間違えるよう 恰 これが不思議なことに、 好 と言 11 場所 に 0 関係に 出来てい 下屋敷 た 誰 0 で 0 b 中 でした に あ 度は る 南 部 様下 ع

兎 捕 角 物 は 相 残ら 当以上 ず 召 に 捕 骨 が つ た 折 0 れ は ました。 刻ば か 手負い り 0 後。 を五六人も 拵えて、

です。 庵を手 居を 誰 手 包 溝 彼 に 主 打 残 吅 人 で 南 き込 南 0 に 9 つ た 部 て 部 殿 れ 家 ん K 0 ( ) 家 て、 る 扮 だ 下 で 0 女 した 屋 福 奥 敷 た に は 岡 ここまで仕事を運ん 城以来 0 仕え、 そ 0 0) は 隣、 手を 0 妻綱手、 九 戸政実 昔 貸 兵粮 の南部兵粮 数寄者 した 丸 0) ح の曾孫で九戸秀実。 0 れ は 機 が だ 建 丸 諸 密 は大変な女丈夫 を の て 方 を を平次に て に 種 知 浮 に、 そ つ 浪 て 0 乾thaca 坤a 儘 見 に て 幸 で、 破 な ガ 11 11 ラ た 擲き 5 9 素 ッ 7 族 大 八 た 実 姓 芝 を た を

親 分 本当に あ の 連 中 は 謀叛 をする気 だ つ た 0 か 61

ょ 部 報 る 晚 処法をさる大名に売り込む積りだ 取 *( )* 11 三千 兵粮 う 引 積 に 古い兵粮丸が手に りさ 両で 丸と言えば少し山気のある大名ならどこで ( ) うところを縛られた た も安いよ。 0 は、 万 露見 南部坂に巣を構えて あ る した時 のを幸 の は惜 つ たのさ。 0 11 用意、 か その通 つ 南部家に 昔 たろう。 話は大方極 0 りの物を 九 戸 b 疑 政 何 飛 実 e s つ 作 を向 て びつく つ け 南

エ 三千 両 11 あ 0 薄 黒 11 丸 薬 0 法 書 が

う な に ひ ど て 4 事を 不が 怒ん し な な き 間 Þ だ。 ア 名 あ 助 る け てや 本 草 る 家 んだが の三 人 ま で殺

「手前、 お絹さんと言うと夢中だが、あれだけは諦めろよ、 高根

の花だ」

弟綾之助の許に引取られて行ったお絹の様子を見に行くつもりょやのすけ、二人は御納戸町の方へ歩いておりました。危うい命を助かって って、

だったのです。

(編注)

ます。 作品中には、 底本のままとしました。 なる古典的な文学作品でもあり、 が見られますが、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異 身体の障害や人権に ご理解、 かかわる、 ご諒承のほどをお願 著者が故人でもありますので、 差別的な語句や表現 い申し上げ

本編 0 初出時 の表題は 「大秘方箋」 です。

挿絵-萩 柚月

初出 「オー ル讀物」 昭和九年二月号 文藝春秋社

底本 錢形平次捕物全集」 第二巻 河出書房 昭和三十一 年五

月三十一日初版

編集・発行 銭形倶楽部



### 銭形倶楽部

http://www.zenigata.club/